

同学に教導を仰ぐべく、「鎌倉時代語研究」誌を創刊して号を重ねて来た。今般、これを承け編集の方針、母胎はそのままに、第四輯からは更に装いを新たに活版によって公刊することになった。鎌倉時代語研究会は、又、昭和五十二年以来、色葉字類抄を中心とする当代の語彙蒐集をも続けて来ている。幸い、先般文部省科学研究費を拝受する機に恵まれ、その成果の一端を別に発表し、更に広く多くの諸賢の御誘掖を仰ぐべく力めても来た。

鎌倉時代語の研究に至る入口は、種々あるであろう。われらのこの歩みは、基礎作業を志向しつつ行う、その僅かな一つの、試みの集いに過ぎない。しかし小さな一つ一つの積重ねこそ、斯の道には必要であろう。本誌が、新しい分野を開拓するための土壌作りの役に立つことを秘かに念じ、且つ、多くの他の入口よりする研究が様々に現れ、実ることを期待するところである。

昭和六十一年三月

小林芳規

目次

巻頭言

今昔物語集の表現と原拠	東辻保和	一
『高山寺本表白集』所収の表白の文体	山本真吾	二
光明真言土沙勸信記の声点について	榎木久薫	三
——軽声声点は意図的に差声されたものか——		
中世仮名資料の句読点について	金子彰	七
——高山寺経蔵の片仮名交り文について——		
古往来の語彙について	来田隆	九
——高山寺本古往来と垂髪往来との比較——		
東大寺図書館蔵極楽遊意長承四年点	松本光隆	一五
鎌倉宋音資料——小叢林略清規——	沼本克明	一八
観智院本「三寶繪詞中」漢字索引	広島大学国語史研究会	二六
会員近著紹介		三三
鎌倉時代語研究集会記録		三五
「鎌倉時代語研究」(第一輯、第八輯) 目次		三六
後記		三七

詞は僅か二一%であつて、名詞の一四%に近い。これは、形容動詞が、名詞に次いで漢語使用率が高く、和語の少ない品詞であるためである。

七、おわりに

高山寺本古往来と垂髪往来の語彙を比較すると、共通する面と相違する面とがある。本稿では、専ら共通性に視点を置いたため、差異性については殆んど触れ得なかつた。稿を改めて考察したい。

古往来の語彙構造の特徴は、計量的方法によつても明らかにし得るけれども、語の意義を抜きにしては、その本質には迫り得ない。語の意義による分類と、本稿で得られた結果とを重ね合わせることによつて、初めて、その全体像が明らかになるであらう。本稿は、そのための最も基礎的な作業である。

注

- (1) 『古往来についての研究^{上世・中世における}』(昭和二十四年)。
- (2) 『雲州往来享禄本 研究と総索引 本文・研究篇』(昭和五七年) 第三章。
- (3) 「国語史料としての高山寺本古往来」(前掲『高山寺本古往来 表白集』五一―二頁以下)。
- (4) 小林芳規博士^{平安鎌倉漢籍訓読の国語史的研究}(昭和四二年) 三五―六頁。
- (5) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(昭和三八) 三四―四頁以下。
- (6) 「基本語彙に関する二三の研究——日本の古典文学作品に於ける——」(『国語学』二四輯 昭和三一)。
- (7) 注(3)論文。

〈付記〉 本稿は第十回鎌倉時代語研究会(昭和六十年八月十二日)で口頭発表したものに基いている。席上、御指導を賜つた小林芳規先生に、厚くお礼申し上げる。

東大寺図書館蔵極楽遊意長承四年点

松 本 光 隆

東大寺図書館所蔵の極楽遊意一帖は、その尾題に「極楽遊意」とあつて書名が明らかであるが、原本には、本来存在したであろうと推測される表紙と、巻首数丁分とが欠失しており、もとの内題や外題がどのようになっていたものであるかは不明である。巻尾は、尾題と奥書とを有するが、はたして、その丁以後に後表紙などが存し、それが欠失したものであるのかどうかは、現存の原本の状況からは不明である。現在東大寺図書館に所蔵の極楽遊意は、前欠、或は後欠かと疑われる現存三十一丁に、現代の厚手の紙二枚を付けて表紙とし、それを紙のこよりで仮綴りされたものである。その新表紙には、中央に「極楽遊意」と墨書され、その右に「長承四年」と墨書されている。表紙右肩には、「東大寺図書館一一一函七一号一冊」のラベルが貼付されている。新表紙見返には、原稿用紙二葉が貼付されており、その原稿用紙には一九五五年八月八日付の築島裕博士の原本に関する備忘が書かれている。

現装は、右のとおりであるが、もと粘葉装であつたものと判断される。料紙には楮紙を用いており、縦二三・四糎、横一四・六糎である。本文は、本紙一丁片面七行に書かれており、本紙には押界がほどこされている。押界の界高は二〇・三糎、界幅は一・八糎である。本文には、仮名と句読点・反点が付されている。片仮名の字体は別掲のとおりであるが、院政期のものであると判ぜられる。奥書は、